小学生をもつ親の子育て状況・不安と子どもの特性

――「第５回愛知の子ども縦断調査」結果第１報――

神田直子・山本理絵

１．第５回愛知の子ども縦断調査について

愛知の子ども縦断調査は、2001年に主に１歳半から３歳の子どもをもつ親の協力で始まり、第５回をむかえた2009調査（09調査）において、対象の子どもたちは、小学校３年生から５年生となった。

これまで４回にわたって行われてきた調査については、詳しくはそれぞれの調査をもとに分析した論文を参照されたい[1)2)3)4)5)6)7)]。

第５回調査の大きな特徴としては、これまで調査回答者は母親[8)]のみであったが、今回は子どもが回答する調査用紙（「子ども調査」）を同封し、学校や家族関係、学校生活、自尊感情について尋ねたことである。それにより、同一家庭での親側の回答と子ども側の回答をマッチングしながら関連をさぐることができこととなった。

親調査については、ほぼ第４回調査（07調査）の内容を踏襲しているが、LD傾向に関する項目を学年進行にあわせて増やし、子どもの学習状況についての親の評価を尋ねた。

本研究では紙幅の関係から、主にこれらの質問項目のうち、子育て不安、学校に関する不安、発達障害につながる特徴、親子関係や子どもの学習状況についての親の認知、近隣との関係、学校への要望などについての単純集計および子どもの学年（以下「学年」と省略する）別比較を行い、必要に応じて07調査の結果と比較する。さらに、今後分析すべき視点、課題を提起したい。

２．調査方法

(1) 調査対象者と時期

第３回、第４回調査において「次回も協力してよい」と答えた人で2009年も同一の住所に住んでいた人579人に09調査用紙を送付し、回答後郵便で返送してもらった。回答者は565人（回答率97.6%）であった。

調査郵送期間は2009年２月であった。

(2) 分析項目

調査内容のうち、今回分析対象としたのは、下記の項目である。

① 子育て不安

子育て不安に関する質問項目は07調査と同様である。この調査からは、特に発達障害関連の親の持つ不安項目を追加している[9)]。

具体的な質問項目は表１のとおりである。回答は「まったくない」から「よくある」の４択式でそれぞれ１点から４点を配点（★は逆転項目）した。点数が高いほど子育て不安が高いことを示す（子育て生活満足感はその逆）。

② 学校関連不安

07年の調査項目を踏襲した（表２）。

③ 広汎性発達障害（PDD）傾向、

広汎性発達障害（PDD）、学習障害（LD）に関する質問項目については、07調査と同様、文部科学省の「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」（2002年実施）の質問項目から抽出した[10)]。広汎性発達障害に関する質問項目は07調査と同じ９項目を設定し（表３）、回答も、文部科学省の評点にあわせて、いいえ－０、多少－１、はい－２　とし、点数化した。

④ 学習障害（LD）傾向

LDに関する質問項目については、聴く、話す、読む、書く、計算する、推論するの６領域各５項目の中から、親が判断しやすいものを２項目ずつ、合計12項目選んだ（表４）。そのさい、文部科学省の調査項目の各領域から１～２項目ずつ選択している高浜市の2005年度版

表１　子育て不安項目と因子分析結果

		1	2	3	4
子育て・子への不安	私には手に負えない子である	**.851**	.010	.001	−.055
	この子のために色々なことをしても、この子に私の気持ちがほとんど通じていないように思う	**.759**	−.091	−.005	−.089
	子どものことでどうしたらよいか分からなくなることがある	**.558**	−.034	.079	.001
	この子が将来何か問題を起こすのではないかと子育てに不安になる	**.545**	−.044	.032	.122
	この子の子育てについて「もっとこうするべき」と周りの人から言われる	**.419**	.019	.011	.182
子育て生活満足感	子育てによって自分が成長していると感じられる	.005	**.627**	.049	−.047
	自分は子育てに向いていると思う	−.060	**.612**	.034	−.031
	子どもを育てるのは楽しい	.016	**.576**	.003	−.128
	自分は子どもをうまく育てていると思う	−.233	**.568**	.048	.082
疲れと圧迫感	考え事がおっくうで、嫌になるときがある	.094	.121	**.733**	.071
	身体の疲れがとれず、いつも疲れている感じがする	.088	.173	**.679**	.047
	（私は）気分転換をするのが上手な方である★	.068	.205	**−.504**	.115
	一日が充実して、ハツラツとしている★	.185	.434	**−.502**	.057
	自分一人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう	.199	.018	**.333**	−.035
マルトリートメント	子どもを、とめどなく叱ったり叩いたりする	.065	.009	0	**.714**
	子どもをつい叩いてしまうことがある	−.045	−.083	−.037	**.647**
	子どもが煩わしくて苛々してしまう	.194	−.132	.084	.272
	Cronbach の α 係数	.806	.733	.715	.645

★は逆転項目
因子抽出法：主因子法
回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

表２　学校関連不安項目と因子分析結果

		1	2
子ども関連	子どもが集団活動に参加できないこと	**.835**	−.039
	子どもが友達にいじめられること	**.727**	.007
	子どもに友達ができないこと	**.706**	.058
	子どもが学校に通うのを嫌がること	**.561**	−.057
	子どもが学校の勉強についていけないこと	**.548**	.006
	先生にしつけの悪い子と思われること	**.439**	.202
親関連	授業参観や保護者会に親が出ること	−.027	**.840**
	自分自身が他のお母さんと親しくなれないこと	.015	**.796**
	Cronbach の α 係数	.809	.797

因子抽出法：主因子法
回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

表３　広汎性発達障害に関する質問項目

1	他の子どもは興味を持たないようなことに興味があり、「自分だけの知識世界」を持っている
2	会話のしかたが形式的であり、抑揚なく話したり間合いが取れなかったりすることがある
3	とても得意なことがある一方で、極端に不得手なものがある
4	いろいろな事を話すが、その時の場面や相手の感情、立場を理解しない
5	友だちと仲良くしたいという気持ちはあるけれど、友達関係をうまく築けない
6	自分なりの独特な日課や手順があり、変更や変化を嫌がる
7	独特な目つき、表情、姿勢をしていることがある
8	順番を待つのが難しい
9	友達のそばにいるが、ひとりで遊んでいる

表４　学習障害に関する質問項目

1	指示されたことの理解が難しい◎
2	思いついたまま話す等、筋道の通った話をするのが難しい◎
3	音読が苦手（語句を抜かしたり、繰り返し読んだりする）◎
4	読みにくい字を書いたり、漢字の細かい部分を書き間違える◎（09調査は下線部のみ）
5	計算するのに時間がかかる◎
6	早がてんや、飛躍した考えをする◎
7	聞き間違いがある（たとえば「知った」を「言った」と間違えるなど）
8	内容を分かりやすく伝えることがむずかしい
9	勝手読みがある（たとえば「行きました」を「いました」と読む）
10	読みにくい字を書く（漢字の形や大きさが整っていない。字をまっすぐに書けない）
11	学年相応の文章題を説くのが難しい
12	学年相応の「量を比較すること」や「量を表す単位」を理解することが難しい（長さや、かさの比較。「15センチは150ミリということ」など）

チェック表を参考にした。なお、07調査では各領域から１項目ずつ６項目設定していた（表中◎）。回答は文部科学省の評点に合わせて、ない－０、まれにある－１、ときどきある－２、よくある－３　とし、点数化した。

⑤　親子関係と子どもの成績についての親の認知

今回の調査では、子どもが小学生となり学習レベルも次第に高まる時期であるので、子どもの学習（成績）について、親がどのようにかかわり子どもの成績をどのように認知しているのかを尋ねる質問項目を新しく加えた。また、親子関係や親の養育態度に関する質問も行った。これらは親の側からの認知であるが、「子ども調査」での子どもの側からの親子関係についての認知に関する質問回答とマッチングさせながら検討できるようにした。

⑥　学校地域でのかかわり、先生・学校への要望

07調査と同様、先生・学校への要望を尋ねた。またこれまでも親の地域でのつながりを尋ねたが、子どもの年齢が上がったので、地域行事への参加も尋ねた。

３．結果と考察

(1)　対象者の属性

表５は、回答者の子どもの学年（以下「学年」と省略する）別に、回答者の属性を表している。

同一の対象群に対して行っている調査であるので、07調査時点と親や子どもの基本的属性はほとんど変わらない。「母親の就業状況」については、07調査では１年生より３年生の方が専業主婦の比率が少なく、パート就労が多かったが、今回の３年生と５年生との比較ではほとんど変わらない。放課後の過ごし方として「学童保育所など」は、５年生では２％以下とごくわずかになっている（07調査１年生では18.4％）。

09調査の４年生は、第１回調査（01調査）時点で１歳半健診後のフォローアップグループ参加者が中心であるので、「子どもの持病・障害」をもつ比率が高い。

(2)　子育て不安

回答を因子分析したところ、07調査とほぼ同様の因子構造がみられたが、「子育て生活満足感（のなさ）」の項目のうち２つ（「一日が充実してハツラツとしている」、「私は気分転換をするのが上手な方である」）が、心身の疲れと合体してひとつの因子となっている（表１）。

また、「子どもがわずらわしくてイライラしてしまう」は、因子負荷量が0.3に満たなかったので、07調査の「子への否定的感情」から除外し、残りの２つの項目からなる「マルトリートメント」因子と名付けた。

子育て不安の得点を、各因子別に合計し、学年別にみたものが、表６である。３年生と５年生とで有意差のあったものは「マルトリートメント」であった。３年生の方が有意に高く、より年少の方がマルトリートメントを受けやすいことが窺われる。

(3)　学校関連不安

学校関係についての親の不安に関しては、前回と同様の項目であるが、因子分析の結果、やや異なった因子構造となった（表２）。07調査では、「友達関係」と「教師・学習・学校行事」の２因子に分かれたが、今回の調査では、前者と、後者のうち教師・学習関連の項目が合体して１つの因子（「子ども関連因子」）となり、残りが「親関連因子」となった。

学校関連不安の因子ごとの合計得点に関しては、３年生と５年生との間に有意差がみられるものはなかった（表６）。

(4)　広汎性発達障害傾向

広汎性発達障害に関する質問項目の回答の合計点数分

表５　分析対象者の属性

			小学校３年		小学校４年		小学校５年		合　計	
	回答者		259	45.8%	23	4.1%	283	50.1%	565	100%
母親・家族の状況	母親の就業状況	専業主婦	79	30.6%	5	21.7%	86	30.5%	170	30.2%
		パート・アルバイト	133	51.6%	13	56.5%	148	52.5%	294	52.2%
		正規雇用	19	7.4%	2	8.7%	24	8.5%	45	8.0%
		自営	16	6.2%	2	8.7%	13	4.6%	31	5.5%
		他	11	4.3%	1	4.3%	11	3.9%	23	4.1%
	配偶者有	有	245	95.0%	23	100.0%	273	97.2%	541	96.3%
		無	13	5.0%	0	0.0%	8	2.8%	21	3.7%
	祖父母同居	有	62	24.0%	6	26.1%	84	30.0%	152	27.1%
		無	196	76.0%	17	73.9%	196	70.0%	409	72.9%
	家庭の年収（税込み）	200万円未満	7	3.0%	0	0.0%	4	1.5%	11	2.1%
		400万円未満	41	17.4%	7	30.4%	34	13.1%	82	15.9%
		600万円未満	80	34.0%	6	26.1%	76	29.3%	162	31.3%
		800万円未満	70	29.8%	4	17.4%	78	30.1%	152	29.4%
		800万円以上	37	15.7%	6	26.1%	67	25.9%	110	21.3%
子どもの状況	子どもの性別	男	130	50.4%	13	56.5%	124	44.0%	267	47.4%
		女	128	49.6%	10	43.5%	158	56.0%	296	52.6%
	子どもの放課後	家	170	65.9%	18	78.3%	208	74.0%	396	70.5%
		学童保育	23	8.9%	0	0.0%	5	1.8%	28	5.0%
		他	65	25.2%	5	21.7%	68	24.2%	138	24.6%
	きょうだい	有	230	89.1%	20	87.0%	253	89.7%	503	89.3%
		無	28	10.9%	3	13.0%	29	10.3%	60	10.7%
	子どもの持病・障害	有	29	11.3%	4	17.4%	30	10.7%	63	11.3%
		無	227	88.7%	19	82.6%	250	89.3%	496	88.7%

表６　因子ごとの子育て・学校関連不安得点（学年別）

		学年	度数	平均値	標準偏差	3年と5年の差
子育て不安	子育て・子への不安	3	256	4.55	2.89	n.s.
		4	23	6.00	2.61	
		5	277	4.64	2.88	
	子育て生活満足	3	251	7.90	2.05	n.s.
		4	23	6.48	2.45	
		5	274	7.59	2.07	
	疲れと圧迫感	3	256	7.80	2.87	n.s.
		4	23	8.13	2.72	
		5	281	8.10	2.58	
	マルトリートメント	3	258	2.03	1.40	*
		4	23	2.26	1.21	
		5	281	1.77	1.32	
学校関連不安	子ども関連	3	255	2.24	2.97	n.s.
		4	23	4.30	3.98	
		5	282	2.56	3.19	
	親関連	3	256	0.84	1.17	n.s.
		4	23	1.04	1.19	
		5	282	0.98	1.48	

t検定：* P<.05

布は、図１～３および付表１のとおりである。得点が高いほど広汎性発達障害の傾向を強くもっていることを表している。小学校３年生と５年生では０点と１点の子どもが半数以上であるが、高得点から１割の子どもは６点以上である。文部科学省の調査では評点の合計が22ポイント以上（最高54ポイント）の児童生徒を、「『対人関係やこだわり等』の問題を著しく示す児童生徒」としてピックアップしているが、その基準の割合にあわせると本研究では18満点中７点以上にあたり、３年生では、5.5％、４年生27.3％、５年生では7.6％となる。先に述べたように、小学校４年生は、健診事後のフォローアップグループ参加者や障害をもっている子どもが多く含まれているので、点数が高い子どもの比率も高くなっているのであろう。

文部科学省の調査では、小中学校の通常学級における「対人関係やこだわり等」の問題を著しく示す児童生徒は、0.8％であったので、それに比べると３年生、５年生とも高い比率となっているが、本調査の対象児には、２、３歳の時期に診断を受けた自閉症の子どもも含まれており、通常学級の在籍児に限定していないことにもよると考えられる。

(5)　学習障害傾向

07調査と同じ質問６項目の回答の合計点の分布は、図４～６、付表２のとおりである。得点が高いほどLDの傾向を強くもっていることを表している。小学校３年生も小学校５年生も、約半数が３点以下、11点以上が約１割であった。07調査の１年生では10点以上が約１割だったので、そのときよりもやや点数が高い層が多く

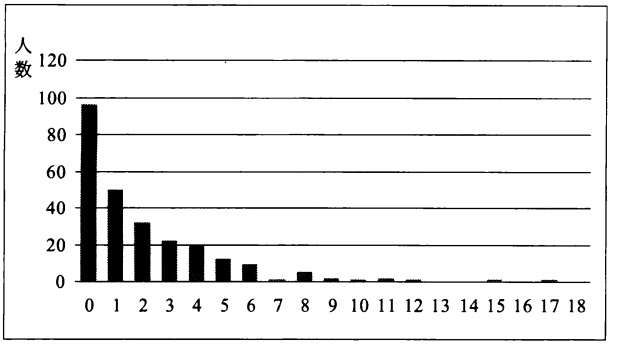

図1　PDD 合計点分布（3年生）

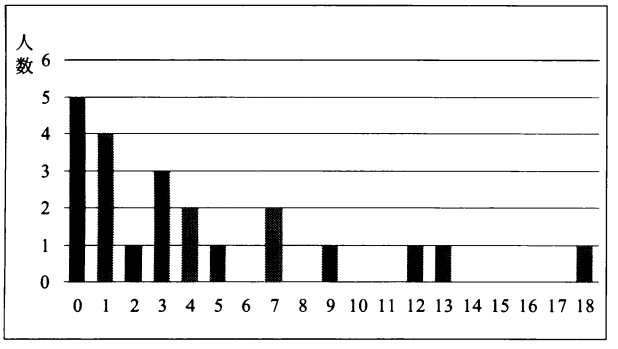

図2　PDD 合計点分布（4年生）

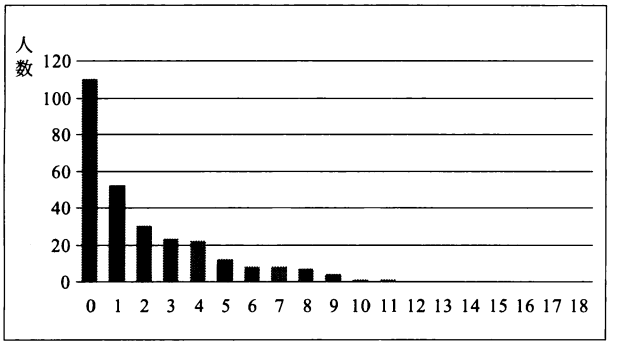

図3　PDD 合計点分布（5年生）

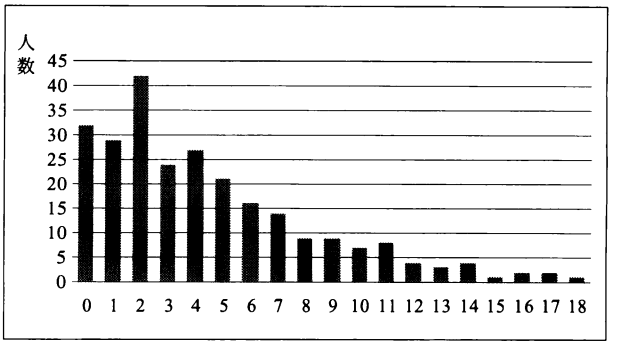

図4　LD6項目合計点分布（3年生）

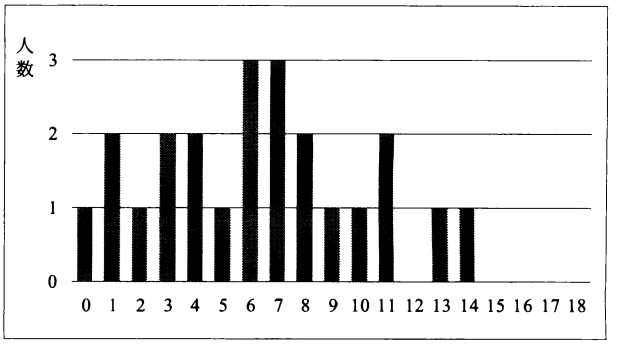

図5　LD6項目合計点分布（4年生）

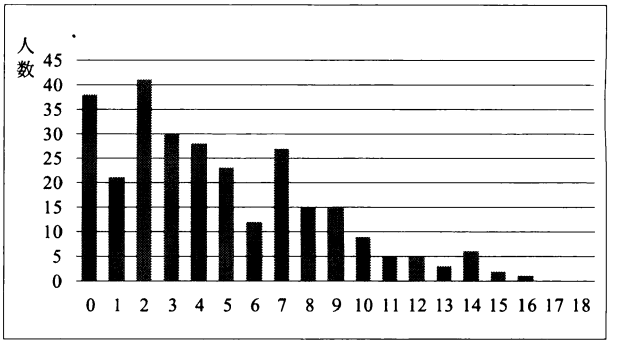

図6　LD6項目合計点分布（5年生）

なっている。07年調査の3年生では3点以下が約4割、4点以下が約半数だったので、そのときよりも点数の低い（困難が少ない）層がやや減っている。小学校4年生では、半数が6点以下で、10点以上が約2割いる。07調査の小学校2年生では、10点以上が3割いたので、そのときよりも点数が高い層が減っている。これらの変化は、学年進行による発達の変化なのか、回答者の違いによるものなのかは分析できていない。

09調査でのLDに関する全質問12項目の回答の合計点の分布は、図7～9および付表3のとおりである。小学校3年生では、約半数が6点以下、21点以上が約1割、小学校5年生では約半数が7点以下、21点以上が約1割であった。小学校4年生では、半数が11点以下で、18点以上が約3割いる。小学校4年生ではやはり、点数が高い子どもの比率が高くなっている。

⑹　子どもの学習についての親の認知とかかわり

今回初めて尋ねた質問が「お子さんの学校での成績は、クラスの中でどのくらいですか」という、成績の相対的位置に関するものであった。その結果表7のように、全体としては「中」が4割であるが、その上（「中の上」、「上位」）が5割近くあり、その下（「中の下」、「下位」）と答えている人は1割強であった。文字通り解せば、「中」の上下は同じ程度になるはずであるが、比較的成績のよい子どもたちの親が回答者に偏っているのか、または現在学校による成績の評価・評定が「観点別評価」や「目標に準拠した評価」になってきている[11]の

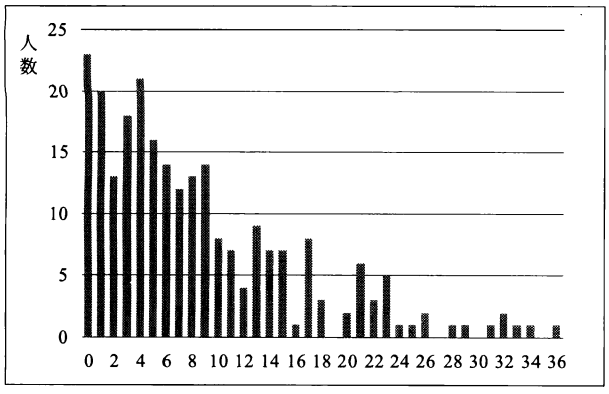

図７　LD12項目合計点分布（３年生）

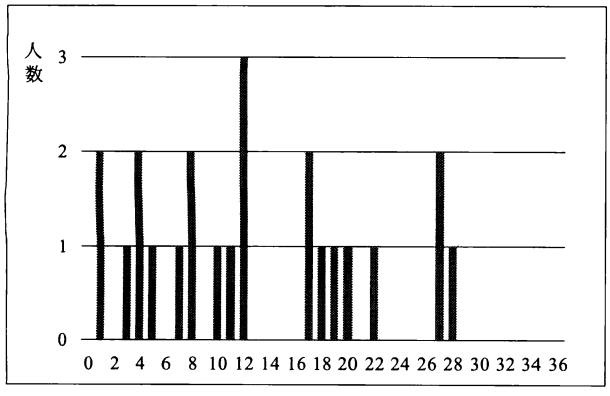

図８　LD12項目合計点分布（４年生）

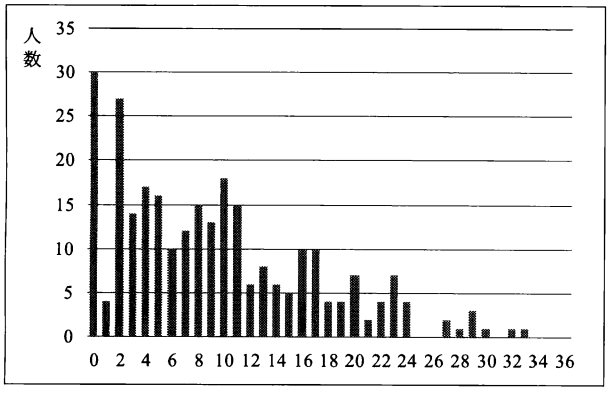

図９　LD12項目合計点分布（５年生）

で、親たちは比較的楽観的に子どもの成績をみることができるのか、どちらかは分からない。

家庭で宿題や勉強を教えている比率は、３年生より５年生の方が頻度が少なく、有意差があった（表８）。07年調査の１年生では「ほとんど毎日」が４割であったので、高学年になるにつれ、家庭での親による学習指導は難しくなっていることが分かる。塾に行っている子どもは５年生ではほぼ６割であり、学校での勉強の補充を「外注」していることがうかがわれる（表９）。

⑺　親子関係についての親の認知

親子関係についての親の認知に関する質問への回答をみてみよう（表10～12）。

「子どもと学校のことについて話をする」ことは、「よくある」、「時々ある」を合わせると95％にのぼり、本研究の対象者においては、親子間の学校に関する事柄の交流はよく持たれているようである。有意差はないが、「よくある」は５年生が３年生よりもやや少なく、今後子どもが思春期になっていくにしたがっての推移を見守りたい。

しかしこれはいずれにしても、「親の側からの認知」であり、同時に行った「子ども調査」と関連させながら、子どもの側からの親子関係についての認知とのズレ・一致を検討する必要があるだろう。

⑻　学校・地域でのつきあい・相談

子どもが小学生になり行動範囲が広がると、親の子どもを通したネットワークでの活動範囲も広がり、また地域活動にも参加する条件ができてくる。

学校の懇談会参加は、高学年になっても高い水準で半数以上が「よくある」で、「時々」を合わせると８割以上になる。また、「子どもの友達の親と話をする」も８割である。PTA役員など、より能動的なかかわりはやや減り、６割であるが、地域イベント参加は７割となっている（表13～16）。

全体としては、大半の人が学校や近隣の会合、催しに参加し、親同士の交流もなされているが、「子どもの友達の親と話をする」に対して「全然ない」「あまりない」を合わせて約２割となっており、地域の中で孤立しがちな親も一定程度存在していることは、留意しなければならないであろう。

先に⑶でみたような「学校関連不安」について、心配事を相談したことがあるかについては約７割の人が相談しておりもっとも多いのが、「夫」である（表17～18）。次いで近所の知人、祖父母、先生、友人となっている。相談機関は４％にしかすぎず、幼児期にくらべ少なくなっている。家族内や地域のネットワークで相談し解決することが多いということであろうが、これまでの「愛知の子ども縦断調査」で明らかになっているように、子どもの障害や個性などからくる困難を抱えている場合、一般的な会話や学習指導などでは解決しないどころか、悩みが一層深刻になってしまう場合もある。小学生を対象にした公的な相談機関の役割を検討することが必要であろう。

⑼　先生・学校への要望

先生に子どもの個性や特性を理解してもらっていると

表7　お子さんの成績はクラスの中でどのくらい（学年別）

		上位	中の上	中	中の下	下位	合計
3年生	人数	51	79	98	15	8	251
	%	20.3%	31.5%	39.0%	6.0%	3.2%	100.0%
4年生	人数	4	4	11	2	2	23
	%	17.4%	17.4%	47.8%	8.7%	8.7%	100.0%
5年生	人数	46	80	112	26	14	278
	%	16.5%	28.8%	40.3%	9.4%	5.0%	100.0%
合計	人数	101	163	221	43	24	552
	%	18.3%	29.5%	40.0%	7.8%	4.3%	100.0%

表8　家庭で宿題や勉強を教えているか（学年別）

		毎日	時々	教えていない	合計
3年生	人数	48	194	16	258
	%	18.6%	75.2%	6.2%	100.0%
4年生	人数	5	15	3	23
	%	21.7%	65.2%	13.0%	100.0%
5年生	人数	26	227	29	282
	%	9.2%	80.5%	10.3%	100.0%
合計	人数	79	436	48	563
	%	14.0%	77.4%	8.5%	100.0%

表9　塾や習い事に行っている（学年別）

		学習塾	習い事
3年生	人数	144	213
	%	56.3%	83.2%
4年生	人数	11	20
	%	47.8%	87.0%
5年生	人数	167	221
	%	59.2%	78.0%
合計	人数	322	454
	%	57.4%	80.9%

表10　子どもと学校のことについて話をする（学年別）

		よくある	時々ある	あまりない	全然ない	よくある
3年生	人数	161	88	9	0	258
	%	62.4%	34.1%	3.5%	0.0%	100.0%
4年生	人数	12	8	2	1	23
	%	52.2%	34.8%	8.7%	4.3%	100.0%
5年生	人数	160	104	14	1	279
	%	57.3%	37.3%	5.0%	0.4%	100.0%
合計	人数	333	200	25	2	560
	%	59.5%	35.7%	4.5%	0.4%	100.0%

表11　子どもがしていることに黙っていられず干渉する（学年別）

		よくある	時々ある	あまりない	全然ない	よくある
3年生	人数	20	166	68	4	258
	%	7.8%	64.3%	26.4%	1.6%	100.0%
4年生	人数	1	16	6	0	23
	%	4.3%	69.6%	26.1%	0.0%	100.0%
5年生	人数	36	162	74	7	279
	%	12.9%	58.1%	26.5%	2.5%	100.0%
合計	人数	57	344	148	11	560
	%	10.2%	61.4%	26.4%	2.0%	100.0%

表12　子どもを感情的に叱ってしまう（学年別）

		よくある	時々ある	あまりない	全然ない	よくある
3年生	人数	23	160	65	9	257
	%	8.9%	62.3%	25.3%	3.5%	100.0%
4年生	人数	2	16	5	0	23
	%	8.7%	69.6%	21.7%	0.0%	100.0%
5年生	人数	17	160	92	10	279
	%	6.1%	57.3%	33.0%	3.6%	100.0%
合計	人数	42	336	162	19	559
	%	7.5%	60.1%	29.0%	3.4%	100.0%

答えているのは全体の9割、要望があるのは勉強面で4分の1の人、友達関係で8％、要望が伝えられると思っている人は約7割、学校の対応があった人は9割であるが、それに満足している人は対応のあった人のうちの7割弱である（表19〜22）。

4年生は「特性を理解してもらっていない」と答えている比率が高く先生に要望が伝えられるとしている人が他に比べて低い。4年生は幼児期フォローアップ児であった比率が高いことから、小学生段階となり勉強面での困難をかかえている子が多いことも予想される。他の学年も含めそれぞれ「特性」別に、要望の中身、先生への伝え方や伝わりにくさなど、自由記述も含め検討していく必要がある。

表13　子どもの友達の親と話をする（学年別）

		よくある	時々ある	あまりない	全然ない	よくある
3年生	人数	95	114	42	7	258
	%	36.8%	44.2%	16.3%	2.7%	100.0%
4年生	人数	6	15	2	0	23
	%	26.1%	65.2%	8.7%	0.0%	100.0%
5年生	人数	81	139	53	9	282
	%	28.7%	49.3%	18.8%	3.2%	100.0%
合計	人数	182	268	97	16	563
	%	32.3%	47.6%	17.2%	2.8%	100.0%

表14　PTA役員など学校の手伝いする（学年別）

		よくある	時々ある	あまりない	全然ない	よくある
3年生	人数	50	96	67	45	258
	%	19.4%	37.2%	26.0%	17.4%	100.0%
4年生	人数	5	6	9	3	23
	%	21.7%	26.1%	39.1%	13.0%	100.0%
5年生	人数	60	125	68	29	282
	%	21.3%	44.3%	24.1%	10.3%	100.0%
合計	人数	115	227	144	77	563
	%	20.4%	40.3%	25.6%	13.7%	100.0%

表15　地域や自治体のイベントに参加する（学年別）

		よくある	時々ある	あまりない	全然ない	よくある
3年生	人数	55	131	55	17	258
	%	21.3%	50.8%	21.3%	6.6%	100.0%
4年生	人数	1	14	6	2	23
	%	4.3%	60.9%	26.1%	8.7%	100.0%
5年生	人数	51	149	65	17	282
	%	18.1%	52.8%	23.0%	6.0%	100.0%
合計	人数	107	294	126	36	563
	%	19.0%	52.2%	22.4%	6.4%	100.0%

表16　学校のクラス懇談会などに参加する（学年別）

		よくある	時々ある	あまりない	全然ない	よくある
3年生	人数	146	68	33	10	257
	%	56.8%	26.5%	12.8%	3.9%	100.0%
4年生	人数	10	10	2	1	23
	%	43.5%	43.5%	8.7%	4.3%	100.0%
5年生	人数	135	98	35	12	280
	%	48.2%	35.0%	12.5%	4.3%	100.0%
合計	人数	291	176	70	23	560
	%	52.0%	31.4%	12.5%	4.1%	100.0%

表17　心配ごとを相談したことがあるか(学年別)

		ある	ない	ある
3年生	人数	146	71	217
	%	67.3%	32.7%	100.0%
4年生	人数	16	3	19
	%	84.2%	15.8%	100.0%
5年生	人数	156	72	228
	%	68.4%	31.6%	100.0%
合計	人数	318	146	464
	%	68.5%	31.5%	100.0%

表18　相談相手（学年別）　（複数回答）

		夫	近所知人	祖父母	先生	友人*	相談機関
3年生	人数	115	88	69	53	39	5
	%	76.2%	58.3%	45.7%	35.1%	25.8%	3.3%
4年生	人数	14	7	8	7	5	2
	%	82.4%	41.2%	47.1%	41.2%	29.4%	11.8%
5年生	人数	124	95	62	62	63	6
	%	77.5%	59.4%	38.8%	38.8%	39.4%	3.8%
合計	人数	253	190	139	122	107	13
	%	77.1%	57.9%	42.4%	37.2%	32.6%	4.0%

表19　先生に子どもの個性や特性を理解してもらっている（学年別）

		いない	いる	いない
3年生	人数	25	228	253
	%	9.9%	90.1%	100.0%
4年生	人数	5	18	23
	%	21.7%	78.3%	100.0%
5年生	人数	23	247	270
	%	8.5%	91.5%	100.0%
合計	人数	53	493	546
	%	9.7%	90.3%	100.0%

表20　学校での勉強面での要望（学年別）

		勉強面	友達関係
3年生	人数	62	24
	%	24.4%	9.4%
4年生	人数	7	1
	%	30.4%	4.3%
5年生	人数	66	19
	%	24.2%	6.9%
合計	人数	135	44
	%	24.5%	7.9%

4．本研究の今後の分析するべき課題

本稿では、各質問項目に対する学年ごとの集計を中心に、基礎的データをまとめた。今後、子どもの特性とりわけ広汎性発達障害・学習障害・ADHDなどの発達障害に関連のある特徴をもつ子どもの親の、子育て状況や不安、支援ニーズなどとの関連を分析していくことが必要である。

さらに、今回は母親とともに、子ども自身にも家族関係や学校生活・友達関係、自尊感情等に関する質問紙調査実施し回答を得ている。この回答と上記の親の回答とを照合し、親のとらえる子どもの特徴や子育て不安と子ども自身がとらえる生活状況との関連について分析することによって、興味深い結果が得られることが期待できる。そして、親の回答については8年間にわたる縦断的

表21　先生に要望を伝えることができるか（学年別）

		先生に要望伝えられる	学校の対応あった
3年生	人数	188	166
	%	74.9%	90.7%
4年生	人数	13	12
	%	59.1%	100.0%
5年生	人数	189	175
	%	69.0%	92.6%
合計	人数	390	353
	%	71.3%	91.9%

表22　対応への満足（学年別）

		満足していない	満足した	どちらとも言えない	合　計
3年生	人数	18	119	43	180
	%	10.0%	66.1%	23.9%	100.0%
4年生	人数	·0	10	4	14
	%	0.0%	71.4%	28.6%	100.0%
5年生	人数	15	123	45	183
	%	8.2%	67.2%	24.6%	100.0%
合計	人数	33	252	92	377
	%	8.8%	66.8%	24.4%	100.0%

データが蓄積されたので、家庭や学校で困難を抱える子どもたちの、乳幼児期の特徴や親の意識などとの関連について縦断的に分析していくことによって、子どもの変化や親の意識の変化が明らかになり、障害の早期発見や早期支援の方法を改善・開発することに寄与することができるであろう。

また、第4回調査では、家庭の経済的状況に関して、主観的な経済的ゆとり感について質問したが、今回の調査では、客観的指標である家庭の年収を質問項目に入れた。年収と通塾率や子どもの成績との関連についてはすでに多くの指摘があるが、親の不安との関連についてはあまり調査されていない。今後、家庭の年収と子育て不安、学校関連不安との関連、そして不安と関連していると思われる親の地域や学校でのつながり（「子どもの友達の親と話をする」、「PTA役員など学校の仕事の手伝いをする」、「地域や自治体のイベントや行事に参加する」、「学校のクラス懇談会（保護者会）などに参加する」、「先生に要望を伝えたことがあるか」、相談相手等）と年収の関連について分析していくことによって、経済的な視点を考慮した支援方法も検討していきたい。

本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金による研究（基盤研究C、平成18年度～21年度、課題番号18530760）「幼児期に多動・衝動的傾向を示す子どもの学童期における問題と支援に関する縦断的研究」（代表：神田直子、共同研究者：山本理絵、伊田勝憲、小渕隆司、石野陽子）によるものである。

注

1）神田直子、山本理絵（2001）子育て困難を抱える親への子育て支援のあり方　児童教育学科論集 35、21–42
2）山本理絵、神田直子（2003）子育て困難を抱える親への子育て支援のあり方(2)「育児不安」と性別役割分業・母親役割意識の関連を中心に　児童教育学科論集 36、39–54
3）山本理絵、神田直子（2003）育児期の困難さに応じた子育て支援　季刊保育問題研究 通号201、126–140　新読書社
4）神田直子、山本理絵（2004）子どもの「育てにくさ」と親の育児不安・マルトリートメント―1歳から4歳の発達的変化―　児童教育学科論集 37、31–40
5）神田直子、山本理絵（2005）子どもの「育てにくさ」と親の育児不安・マルトリートメント(3)―1歳から6歳の横断的分析および3年間の縦断的分析より―　児童教育学科論集 38、1–12
6）山本理絵、神田直子（2005）子どもの「育てにくさ」と育児不安・マルトリートメント(2)―4歳児と6歳児を中心に―　愛知県立大学文学部論集 児童教育学科編 53、33–56
7）神田直子、山本理絵（2008）幼児期から学童期への移行期における親の子育て状況と不安、支援ニーズ―「第4回愛知の子ども縦断調査」結果第1報―　愛知県立大学文学部論集 児童教育学科編 56、17–34
8）筆者らは、「子育ては母親責任」論には異論を持っているが、調査実施に当たっては、第1回の調査においてほとんどの回答者が母親だったため、質問項目設計及び分析の便宜のため、調査対象を母親のみに限ることとした。
9）根来あゆみ、山下光、竹田契一（2004）発達障害児の主観的育てにくさ感―母親への質問紙調査による検討―　発達　97, 13–18　ミネルヴァ書房
10）文部科学省「『通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査』調査結果」2003年
11）田中耕治（2002）指導要録の改定と学力問題 26–32　三学出版

付表１　広汎性発達障害に関する質問項目の合計点の分布（学年別）

点	小学校３年			小学校４年			小学校５年		
	人数	%	累積%	人数	%	累積%	人数	%	累積%
18	0	0	0	1	4.5	4.5	0	0	0
17	1	0.4	0.4	0	0	4.5	0	0	0
16	0	0	0.4	0	0	4.5	0	0	0
15	1	0.4	0.8	0	0	4.5	0	0	0
14	0	0	0.8	0	0	4.5	0	0	0
13	0	0	0.8	1	4.5	9.1	0	0	0
12	1	0.4	1.2	1	4.5	13.6	0	0	0
11	2	0.8	2.0	0	0	13.6	1	0.4	0.4
10	1	0.4	2.4	0	0	13.6	1	0.4	0.7
9	2	0.8	3.1	1	4.5	18.2	4	1.4	2.2
8	5	2.0	5.1	0	0	18.2	7	2.5	4.7
7	1	0.4	5.5	2	9.1	27.3	8	2.9	7.6
6	9	3.5	9.1	0	0	27.3	8	2.9	10.4
5	12	4.7	13.8	1	4.5	31.8	12	4.3	14.7
4	19	7.5	21.3	2	9.1	40.9	22	7.9	22.7
3	22	8.7	29.9	3	13.6	54.5	23	8.3	30.9
2	32	12.6	42.5	1	4.5	59.1	30	10.8	41.7
1	50	19.7	62.2	4	18.2	77.3	52	18.7	60.4
0	96	37.8	100.0	5	22.7	100.0	110	39.6	100.0
合計	254	100.0		22	100.0		278	100.0	

付表２　LDに関する質問項目（07と共通６項目）の合計点の分布

点	小学校３年			小学校４年			小学校５年		
	人数	%	累積%	人数	%	累積%	人数	%	累積%
18	1	0.4	0.4	0	0	0	0	0	0
17	2	0.8	1.2	0	0	0	0	0	0
16	2	0.8	2.0	0	0	0	1	0.4	0.4
15	1	0.4	2.4	0	0	0	2	0.7	1.1
14	4	1.6	4.0	1	4.3	4.3	6	2.1	3.2
13	3	1.2	5.2	1	4.3	8.6	3	1.1	4.3
12	4	1.6	6.8	0	0	8.6	5	1.8	6.1
11	8	3.1	9.9	2	8.8	17.4	5	1.8	7.9
10	7	2.7	12.6	1	4.3	21.7	9	3.2	11.1
9	9	3.5	16.1	1	4.3	26.0	15	5.3	16.4
8	9	3.5	19.6	2	8.8	34.8	15	5.3	21.7
7	14	5.5	25.1	3	13.0	47.8	27	9.6	31.3
6	16	6.3	31.4	3	13.0	60.8	12	4.3	35.6
5	21	8.2	39.6	1	4.3	65.1	23	8.2	43.8
4	27	10.6	50.2	2	8.8	73.9	28	10.0	53.8
3	24	9.4	59.6	2	8.7	82.6	30	10.7	64.5
2	42	16.5	76.1	1	4.3	86.9	41	14.5	79.0
1	29	11.4	87.5	2	8.8	95.6	21	7.5	86.5
0	32	12.5	100.0	1	4.3	100.0	38	13.5	100.0
合計	255	100.0		23	100.0		281	100.0	

付表３　LDに関する質問項目（12項目）の合計点の分布

点	小学校３年			小学校４年			小学校５年		
	人数	%	累積%	人数	%	累積%	人数	%	累積%
36	1	0.4	0.4	0	0	0	0	0	0
35	0	0	0.4	0	0	0	0	0	0
34	1	0.4	0.8	0	0	0	0	0	0
33	1	0.4	1.2	0	0	0	1	0.4	0.4
32	2	0.8	2.0	0	0	0	1	0.4	0.8
31	1	0.4	2.4	0	0	0	0	0	0
30	0	0	2.4	0	0	0	1	0.4	1.2
29	1	0.4	2.8	0	0	0	3	1.1	2.3
28	1	0.4	3.2	1	4.3	4.3	1	0.4	2.7
27	0	0	3.2	2	8.8	13.1	2	0.7	3.4
26	2	0.8	4.0	0	0	13.1	0	0	3.4
25	1	0.4	4.4	0	0	13.1	0	0	3.4
24	1	0.4	4.8	0	0	13.1	4	1.4	4.8
23	5	2.0	6.8	0	0	13.1	7	2.5	7.3
22	3	1.2	8.0	1	4.3	17.4	4	1.4	8.7
21	6	2.4	10.4	0	0	17.4	2	0.7	9.4
20	2	0.8	11.2	1	4.3	21.7	7	2.5	11.9
19	0	3.1	14.3	1	4.3	26.0	4	1.4	13.3
18	3	1.2	15.5	1	4.3	30.3	4	1.4	14.7
17	8	3.1	18.6	2	8.8	39.1	10	3.6	18.3
16	1	0.4	19.0	0	0	39.1	10	3.6	21.9
15	7	2.8	21.8	0	0	39.1	5	1.8	23.7
14	7	2.8	24.6	0	0	39.1	6	2.2	25.9
13	9	3.5	28.1	0	0	39.1	8	2.9	28.8
12	4	1.6	29.7	3	13.0	52.1	6	2.2	31.0
11	7	2.8	32.5	1	4.3	56.4	15	5.4	36.4
10	8	3.1	35.6	1	4.3	60.7	18	6.5	42.9
9	14	5.5	41.1	0	0	60.7	13	4.7	47.6
8	13	5.1	46.2	2	8.8	69.5	15	5.4	53.0
7	12	4.7	50.9	1	4.3	73.8	12	4.3	57.3
6	14	5.5	56.4	0	0	73.8	10	3.6	60.9
5	16	6.3	62.7	1	4.3	78.1	16	5.8	66.7
4	21	8.2	70.9	2	8.8	86.9	17	6.1	72.8
3	18	7.1	78.0	1	4.3	91.2	14	5.1	77.9
2	13	5.1	83.1	0	0	91.2	27	9.8	87.7
1	20	7.9	91.0	2	8.8	100.0	4	1.4	89.1
0	23	9.0	100.0	0	0	100.0	30	10.9	100.0
合計	254	100.0		23	100.0		277	100.0	